

2023 夏の終わりに

『高校野球 応援する人たちの思い』



長崎県高等学校野球連盟 顧問会

も く じ

頁

・はじめに	長崎県高等学校野球連盟 顧問 千綿 勝彦	…… 1
-------	----------------------	------

===== 応援する人たちの思い =====

・五島高等学校野球部	保護者会長	今村 輝生	…… 2
・長崎北陽台高校	父母の会会長	江口 秀一	…… 3
・佐世保実業高校	父母の会会長	家本 泰輔	…… 4
・佐世保南高校	保護者	松浦 敦司	…… 5
・佐世保南高校	2020年度卒業生	中山 喜喬	…… 6
・清峰高校	OB会会長	菅 博樹	…… 7
・波佐見高校	保護者会会長	松尾 丞司	…… 8
・猶興館高校	OB会事務局長	川上 儀明	…… 9
・小浜高校	野球部OB会	宮崎 伸一	……10
・国見高校	保護者会会長	石井 和幸	……11
・島原高校	父母の会会長	清水 邦	……12
・創成館高校	保護者会会長	矢羽田 豪	……13

===== マネージャーたちの思い =====

・長崎工業高校	マネージャー	横尾 彩葉	……14
・長崎東高校	マネージャー	瀨 京桜・廣田 風香	……15
・長崎北陽台高校	マネージャー	寺野 有美子	……16
・長崎北陽台高校	マネージャー	平山 楓	……17
・長崎北陽台高校	マネージャー	平田 唯	……18
・対馬高校	マネージャー	藏本 紅音	……19
・波佐見高校	マネージャー	松尾 千尋	……20
・波佐見高校	マネージャー	村松 愛純	……21
・九州文化学園高校	マネージャー	古川 愛梨咲	……22
・九州文化学園高校	マネージャー	山口 桃実	……24
・諫早高校	マネージャー	田中 芽衣	……25
・創成館高校	マネージャー	吉井 稚奈	……26
・鎮西学院高校	マネージャー	上野 穂佳	……27

付録1 ***** 選手たちの思い *****

・国見高校	主将	石井 脩瑛	……28
・口加高校	主将 (選手宣誓者)	井上 蓮	……30

付録2 ***** 支える人たちの思い *****

・長崎県審判協会	審判委員	田中 康隆	……31
・長崎県審判協会	審判委員	貞松 孝明	……32

付録3 ***** 指導者の思い *****

・対馬高校	監督	青島 立弥	……33
・長崎日本大学高校	部長	山内 徹也	……34

付録4 ***** 高野連に携わって *****

・長崎県高等学校野球連盟	理事長	黒江 英樹	……36
--------------	-----	-------	------

・あとがき	長崎県高等学校野球連盟 顧問 北島 弘道	……37
-------	----------------------	------

今年も高校球児にとって部活動の集大成ともいえる「第105回全国高等学校野球選手権記念長崎大会」が開催されました。7月6日、県高野連加盟校全56校参加、10校による連合3チームを含む49チームによる開会式に始まり、7月24日の決勝戦まで48試合が行われ、高校球児の若さ溢れる青春のドラマが繰り広げられました。

新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、スタンドの応援も制限が解除され、従来と同じようにブラスバンドや大きな声の応援も可能となり、球児の一投一打に応援も大いに盛り上がりました。グラウンドでプレーする球児たちもその応援が励みとなり、プレーにも闘志が湧いたことと思います。

さて、今、高校野球は過渡期にきているとも言われます。加盟校や部員数の減少、それに伴う連合チームの増加。また健康面を配慮した「投手の球数制限」「延長10回からのタイブレーク」「継続試合」暑さ対策「クーリングタイム」、甲子園でのベンチ入りの増加、などがあげられます。このような時代の流れの中、厳しい環境でもあきらめずに部員が4、5人しかいなくても野球部活動を継続している学校が多数あり、頑張っている球児たちに敬意を表したいと思います。

しかし、このような状況の中でも諦めずに球児たちを支え、見守り、協力して応援をされている保護者やOB会、後援会などの人たちにもまた敬意を表したいと思います。

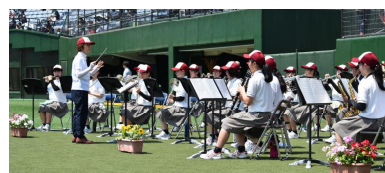
勝っても、負けても試合会場に駆けつけ我が子や母校のために熱心に応援されている人たちはどんな思いを持っておられるのでしょうか。

2023「夏の終わりに」第3回では、そんな応援されている人たちの思いを伝えたいと編集しました。球児のみなさんや関わっている人たちにぜひ、その思いを知っていただけたら幸いです。



第105回全国高等学校野球選手権記念長崎大会開会式

国歌・大会歌唱
長崎北陽台高校 松尾 京さん



開会式司会 長崎北陽台高校
宮崎卓也君 石原彩佳さん

開会式 バトントワラーズ
長崎商業高校

開会式 長崎商業高校吹奏楽部
長崎県営球場にて

私のふたりの息子が、長崎北陽台高校野球部で甲子園を目指し、それぞれが最上級生となる2019年度と2023年度に父母の会会長を務めさせていただきました。

私自身は、高校野球未経験者ですが「野球の楽しさ」に魅せられた人間で、息子たちが小学生でソフトボールを始めて高校野球まで続けてくれたこと、この12年間あまりを振り返り、息子たちとかけがえのない期間を過ごせて幸せだったと思っています。

私と息子たちが高校野球に携わった期間は、新型コロナ禍の真っ只中にありました。長男が3年生となった2020年は3月の対外試合解禁後も練習試合すらままならず、春、NHK杯と立て続けに公式戦中止という憂き目に遭いました。次男の中総体は、試合はできたものの保護者の観戦は認められませんでした。

そして夏の甲子園。インターハイの各種競技が中止に追い込まれる中、「野球だけ特別か」と批判もあり、とうとう中止に追い込まれました。当時の高校球児の無念さは多数報道されましたが、野球だけが特別なのではない、特別なのは競技に関わらず高校生のたった3年しかない貴重な期間なのにと、やり場のない怒りを覚えたものです。

県独自の代替大会、長崎県高野連の皆さまがいち早く態度を決定し、多くの批判にも屈することなく開催していただいたこと、今でもその感謝は忘れません。初戦敗退でたった1試合だけの最後の夏でしたが、区切りをつけられてよかったと思っています。

今年は新型コロナ対応が転換期を迎え、ようやく以前の夏が戻ってきました。次男の代は幸いにしてすべての公式戦が開催され、練習試合も含めてたくさんの「野球の楽しさ」を共有することができました。精一杯プレーする選手たちを、仲間、保護者が声を出して応援する、あらためて普通にできることのありがたみを感じました。

高校野球は昨今、少子化による選手の減少、先生方の働き方改革に伴う指導者としての在り方、酷暑下での練習、試合への取り組み方など多くの問題に直面しています。そんな中、各地で子どもたちに「野球の楽しさ」を伝えてくださっている少年ソフトボール、少年野球の指導者の方々、中学、高校野球部の指導者、先生方、そして長崎県高野連の皆さまへ、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

繰り返しになりますが、息子たちと過ごした野球生活は私の人生において最高に幸せな時間でした。今後も何らかのかたちで野球に関わることができたらと思っています。



県営野球場にて



諫早球場にて

春の大会、NHK杯が終わり、集大成ともいえる高校球児最後の戦いが暑い夏がやってきた。「1日でも長く」「一戦でも多く」親の想いも必然的に高まった。

2年前に高校へと進学し、多方面での変化があったが、野球というスポーツを通じ様々な成長を見せて貰えた。部活外では、和気あいあいと上下の隔てなく仲良くしているが部活に入ると指導者・先輩が先頭に立ち、練習に必死に食らいついていた。2年生では、中堅となり指導を受けつつも後輩へのフォローを行い、3年生の短くも長い「夏の大会」への一助となるよう、なれるように日々頑張っていた。

「夏の大会」が終われば「3年生は引退」。2年生が最高学年となり、自分たちの「夏」に向けての戦いが始まる。日々の練習、一戦一戦が今まで以上に自身の身に積っていったことだろう。保護者の中にも観戦だけでなく、今まで以上に練習・炊き出し等の補助に来る方が増えた。「基礎を鍛え直す」この言葉から始まり、肉体面は元より精神面に至るまで練習に明け暮れる日々、成果を上げるべく強豪校との練習試合を多く設定し、子供たちの成長を共に見てきた指導陣（監督・コーチ・部長）には感謝の念にたえない。

「勝負は水物」というが選手たちのメンタル面が影響していると思う。フィジカル面においては、同じ高校生であり多少の差はあれど大差はないはずだ。

夏の大会一戦目、いろんな考えが巡ったのだろう。いつものパフォーマンスができずに雨風の影響もあり苦戦を強いられたが、客観的にみるとハラハラ、保護者としてはドキドキする良い試合だったと思う。

夏の大会二戦目、朝からの雨でコンディションが良くない中での試合となった。先制はしたものの追いつかれ、そこから始まった投手戦。タイブレークとなり気持ちでの闘い。あと一歩及ばず敗戦となってしまった。

高校での野球生活は終わったが、卒業するまでは部員であり「高校球児」で間違いのない！この間学んだことを後輩に伝え、自身は「進学」「就職」と自分の道を切り開いて欲しい。「経験は力なり」どのような道に進んでも自分の「糧」となるから！もう少し「暑い（暑い）夏」を楽しんで欲しかったけど、2年3か月の奮闘、お疲れ様！



佐世保野球場にて

公園でゴムボール遊びをしていたかと思えば、いつの間にか小学生になり、野球やソフトボールチームに所属。団体活動する中で、挨拶にはじまり、体力や技術面だけではなく、仲間とのつながりや競争心が。中学生にもなれば考えて工夫する力など、様々な方面から知恵を吸収し、いま高校野球というステージにいます。ある時期から道具を大事にし始めた変化一つを見てもその成長が感じられ、それにつられて保護者どうしの交流も楽しい日々が続くようになりました。

これまで、野球ができる環境を整え温かく見守り支えていただいた地域の皆さま、指導者の皆さま、審判や大会運営等に携わっていただいた皆さま、保護者仲間の皆さま、この場を借りてお礼を申し上げますとともに、選手たちには恩返しを含めどのような形でも良いので次世代を担って欲しいと思います。

高校野球では、体力面は圧倒されるほどに強化され、スポーツとしての奥深さなど格段にレベルアップし、わずか2年と少しの期間で最後の夏の選手権県大会を迎えました。これまで積上げてきた成果を花開かせる大会であると思いますので、各々の目標がたち成できるよう、また悔いが残らないよう仲間とともにがむしゃらなプレーを期待しています。

ところで、2020年から3年間ほど新型コロナの蔓延により、選手たちは発散できない不満を抱えて悶々とする日々が続いたものと思います。これは球児たちに限ったことではなく社会全体が我慢を重ね、新しい生活スタイルを模索しながら乗り越えてきました。このような不条理は社会に出ればありふれたこと、苦難を乗り越えていくタフな精神力を身に付ける良い機会であったと捉えて良いのかもしれない。

とはいえ、大会は開催されず、目標を見失う残酷な時期であったことには違いなく、このようなとき、私たち大人は鬱憤を抱える選手たちに対して、適切な選択や行動ができたのだろうか、今になって自問してしまいます。選手たちが全力プレーするように、その時々でベストなサポートができるよう、私たち大人も情報に踊らされず、工夫し成長し続けなければならないと考えさせられるきっかけでした。

不自由なく野球に打ち込める環境のいま、諸先輩の思いも背負って日々戦って欲しいと思います。



諫早球場にて



写真提供：佐世保南高校

私の高校3年時は、新型コロナ真ただ中で本来の夏とは違う夏でした。学校も休校となり実際に部活動も制限され、練習もまともにできず大会も中止となり最後の夏は代替大会として開催され、県で優勝したチームでさえ甲子園でプレーすることができませんでした。

しかし、すべてのチームが甲子園という憧れの舞台がなくても最後まで必死に戦う姿がグラウンドにはありました。一人ひとりが悔しい気持ちを持ちながらもチーム一丸となり戦い抜いたことは今でも忘れられない思い出です。唯一甲子園がなかった世代として違う意味で歴史に残ったと思います。私はこの経験があったからこそどんな状況になっても諦めないこと、ベストを尽くすことが大切だと感じます。

現在は何の制限もなくのびのびと野球ができる状況なので、野球に携わるすべての方々への感謝の気持ちを忘れず野球というスポーツを心から楽しんでプレーして欲しいと願っています。



佐世保野球場にて



写真提供：佐世保南高校



2020年春からの新型コロナウイルス感染拡大で、多くの制限がある中「日々、高校野球に向き合っている後輩たちに何かできないか」と清峰高校野球部OB会として取り組んできたことが幾つかあります。

その一つに、卒業式を迎える野球部三年生にアンケートの回答をお願いしています。2020年3月から継続しています。アンケートの主な内容は、「野球部での思い出や心に残っていること」「尊敬する人について」「高校生活を振り返って思うこと」「仲間や後輩、家族へのメッセージ」などです。

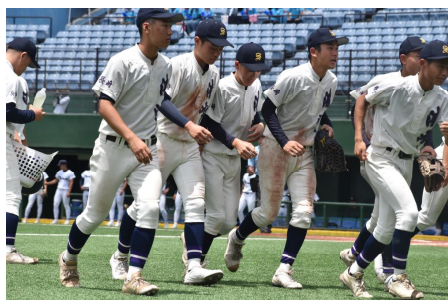
彼らからのメッセージには「仲間や家族、指導陣への感謝」「日々の大切さ」「後輩への思い」「仲間の大切さ」「母校や野球部への誇り」「自らの人間的な成長について」などの言葉が溢れています。

これからの人生において、高校生活で体感し学んだことを生かして行こうと決意と共に、まずは人間的な成長をめざそうという清峰高校野球部の目的がしっかり浸透しているように感じます。これらのメッセージからもそうですが、普段の会話からも彼らの成長を感じる時ほど嬉しい事はありません。

私は毎年、夏の大会前に後輩たちに伝えることがあります。全国にいる野球部OBや卒業生は勝敗に関係なく皆さんを応援しているということ、チーム内での自分の役割を理解し、同じ目標に向かって進んで欲しいということ、この大会は自分自身のために精一杯戦って高校野球の主役はあなたたちであることなどです。

また、野球部OB会活動で特に力を入れて来た取り組みに、2016年から年一回作成する会員向けの会報があります。上記の野球部卒業生アンケートも会報に記載しています。会報が届いた後には、地元の方に限らず故郷を離れた方々からも感想や野球部へのメッセージなどを綴ったお便りやメールをいただくことも多く、私たちの活動が少しでもお役に立てているのなら嬉しく思います。

最後になりますが、高校野球の益々の発展と多くの方々に愛され続け、高校生の道しるべとしてあり続けることを願います。これからも高校野球の主役たちを応援してまいります。



長崎県営野球場にて



全校応援 佐世保野球場にて



写真提供：清峰高校

グラウンドへ行くと、「こんにちは！」大きな声を誰かが発すると続けて、「こんにちは！」が炸裂します。気持ちのいい挨拶をされるとこちらも気持ちよくなりますね。

毎日1つの目標の為に泥だらけになっても気にせず、小走りで練習に向かい、全力で練習に励んでる姿これが青春なのか。15～16歳で親元を離れて寮に入り集団生活。先輩方に規律と秩序を教わる。

朝は5時過ぎに起き、チャリンコに跨りグラウンドへ行く。雨の日も風の日も雪の日も授業が終わるとグラウンドへ。大声で挨拶、校歌、発声練習、集団行動訓練、先輩方のサポート、練習後の自主トレーニング、寮での素振り。1年生の頃は今までと環境も変わり、甘えることもできず、あれこれ大変だったと思う。

2年生、夏の大会が終わると新チームスタート！キャプテンも決まり皆の意気込みを感じたが、世の中はコロナ真ただ中で、感染による遠征の中止、試合中のマスク着用、大声禁止、これまでに経験のないことばかりの時代だった。

感染も落ち着き練習試合が始まった。毎試合がぎこちなく、なかなか勝つことができなかった。ある時を境に1勝また1勝と自信がついたように勝ち続け、顔つきも変わり始めた。

3年生になり、もともと部員数も少なく2年生の力も借りて頑張ってきたメンバーも削られて1年生もメンバーに入るようになった。

夏の大会が近づく頃、キャプテンが監督に『このまま思い出作りの野球するか？下級生の力を借りてでも甲子園をめざすのか？』と問われた。キャプテンは即答で、『下級生の力を借りてでも甲子園をめざします。』と返した。

夏の大会の結果は2回戦敗退だった。彼らがこの2年半やってきた努力が野球の神様には届かなかった。野球の神様、来年こそは波佐見高校に味方してください。

この2年半野球部をのぞかせていただきありがとうございました。まだここに書ききれない事がたくさんありましたが、子供たちの成長過程をみて何かの為に、誰かの為に、自分の為に、皆で取り組む姿勢のすばらしさが勉強になりました。

3年生、ご苦労様でした！ 下級生の皆さん頑張れ！



佐世保野球場にて 写真提供：波佐見高校



県営球場にて

猶興館高校野球部OB会の結成は平成11年度で、会長小田典和、事務局川上儀明で運営しています。

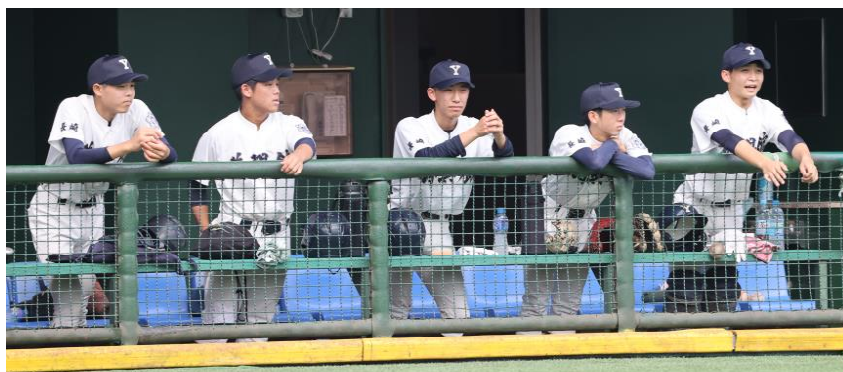
甲子園大会に出場経験のある強豪校・佐世保工業高校で監督をされていた千綿勝彦先生が当校監督に就任されて以来、熱い野球熱を注入された教え子たちで構成されています。

主な活動内容としては、毎年新年1月3日に集いの場を設け、OB戦を行ったり懇親会を開き、昔話や将来の夢を語らいながら親睦を深めています。またそこでは、現役部員の活動費や遠征費の補助の為にカンパを募り支援を行っています。

私たち自身も現役時代には遠征によって、多くの試合経験を積み、技術の上達が図られたり、他校から刺激を得ながら自分たちの実力の現在地を確かめる事ができていましたので、遠征費支援には格別の思いがあります。

近年は新型コロナウイルス感染症により、なかなか集まることが難しかったのですが、OB会の口座を作ることにより遠方からでも支援できる仕組みにしました。私たちが支援しているといえども何か特別な力が宿るわけではありませんが、選手たちにはそうした周囲の支えを感じてもらい、野球に打ち込める環境に感謝する心を忘れないことにより、人としても大きく成長して欲しいと願っています。

猶興館高校野球部は何十年も前ですが、九州大会に出場したことがあります。OB会としては、その時の栄光を再びと夢見ていますが、何よりも平戸市から高校野球の火を絶やさないように現役選手と監督をサポートし続けたいと考えています。



試合を見つめるベンチ 長崎県営野球場にて



練習試合のベンチの様子
伊万里高校グラウンドにて
写真提供：猶興館高校

やってる！ やってる！ 今日も小浜高校グラウンドから大きな声と白球の音が聞こえてきます。

現在、浜高野球部の応援団長を公言し、練習試合や公式戦にほぼ全試合声を張り上げて応援しています。私は、小浜高校野球部の36年前のOBです。野球部の前溝田澄夫監督の教え子になります。

小浜高校野球部イクオール溝田監督と思われる方も多いと思われませんが、監督の高校野球への情熱は、日本一、いや世界一です。今の私があるのは、溝田監督のおかげだと言っても過言ではありません。

溝田監督のエピソードを少し述べさせていただきます。それは私が高校1年生の時のことです。野球の練習の厳しさや私の心の弱さで、野球部を辞めようと思いました。監督に「辞めさせて下さい！」、監督は「何でや？」私の話を最後まで聞いて下さった後、「おまえは逃げるのか」「なあ宮崎、人間はな、いい時や順調な時は誰でもよかと。苦しい時や辛い時こそ頑張れ！！」監督のこの言葉で私は3年間野球を続けることができ、3年生の時はキャプテンまで努めることができました。

自分自身の53年の人生は、ドラマ以上の波瀾万丈の人生でしたが、監督のこの言葉を噛みしめ、今まで乗り越えることができました。

「人は、誰と出会うかでその人生は決まる」という言葉があります。本当に小浜高校野球部と溝田監督との出会いに、感謝の気持ちでいっぱいです。

私や野球部OBの願いは、50年以上ご指導下さっている溝田監督を「もう一度甲子園の舞台へ！」でした。

「毎日一步前進・心の野球」これからも勝っても負けても、心の故郷である小浜高校野球部を応援し続けます。

溝田澄夫監督が、今年（令和5年）7月26日、1年間の闘病生活の末76歳で他界されました。1970年（昭和45年）から53年間、夏の猛暑の日も冬の厳寒の時も、小浜高校のグラウンドに立ち続けた小浜の名将溝田澄夫監督、今まで本当にありがとうございました。監督との数々の思い出と教えを心に刻み、生きて行きます。

最後に、長年にわたり溝田監督を理解し、支えてこられた奥様とお子様にご心より感謝申し上げます。



写真提供：本人

恩師 溝田監督と（小浜高校グラウンドにて）



県営野球場にて

国見高校 保護者会会長 石井 和幸

令和5年夏の大会。私たち家族にとって最後の大会を迎えました。毎年夏の時期になると年甲斐もなく気持ちが高ぶってきます。

特に今回は、特別な夏です。三男脩瑛、ここまで二人の兄の背中を見て来て野球を続けてきたと思います。実は私も国見高校で白球を追ってきた野球人です。

長男が国見高校へ進学し、野球を頑張ると言った時は、今でも覚えています。決して優遇される野球環境ではないといわれても一生懸命にやってくれました。次男も兄を追い、入学しました。強豪相手に最後まで善戦しました。そして三男の最後の大会になりました。

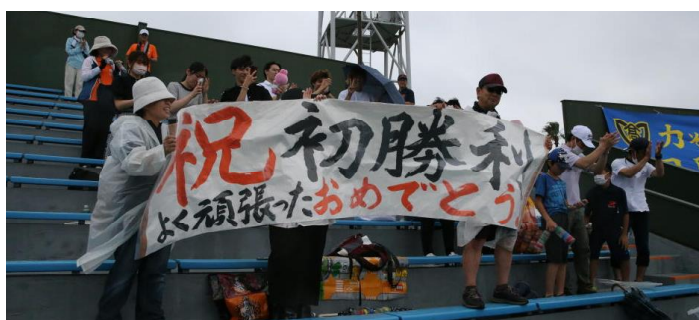
三男は、最高の連合チームのキャプテンとして戦いました。初戦は連合チームとして初の夏の一勝をあげ二回戦の長崎商業戦では、全校応援という最高の後押しで支えていただきました。

コロナ解禁ということで、声がかかるまで応援しました。結果は負けましたが、9回の攻撃まで目に焼き付けることが出来ました。

私たちは、家族全員で試合を見る事ができ感謝しかありません。国見高校野球部に入部してよかったと心から思います。本当に皆様ありがとうございました。



熱い応援 長崎県営野球場にて



佐世保野球場にて

「文武両道」の校是のある島原高校野球部に入部して、先生方に御指導をいただきながら、部員とともに練習に励み、マネージャーに支えられて、この2年半過ごしてきました。勉強との両立は大変だったと思います。

応援に行ったときは「怪我をしませんように！」と願い、コロナのこともあり「皆で最後の大会に出場できますように！」と願ってきました。

夏の大会前に、マネージャーが鶴文字（2600羽）「挑」を作製してくれました。文字通り挑み続けることができ、部員全員で3回戦まで進むことができたことはマネージャーの思いがあったからだと思います。また、良い設備の中で練習に取り組めるのは桜球会（島原高校野球部OB会）の北島会長をはじめ多くのOBの方々の思い入れもあり、支えていただいているからです。

暑い中、今年もOB会の方をはじめたくさんの方々がスタンドまで応援に来て下さいました。すばらしい応援ができたことをありがたく感謝し、その応援に応えようと、部員たちも一生懸命プレイできたのではないかと思います。

試合が終わってからも、たくさん声をかけていただき胸があつくなりました。『夏と言えば高校野球』とよく聞きますが、最後の年にその言葉の重みがわかったような気がしました。

たくさんの方々から声援をいただけたこと。素晴らしい環境の中で野球ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



伝統になったマネージャー作成の織鶴文字



懸命の応援

諫早球場にて

写真提供：島原高校



創成館高校 保護者会会長 矢羽田 豪

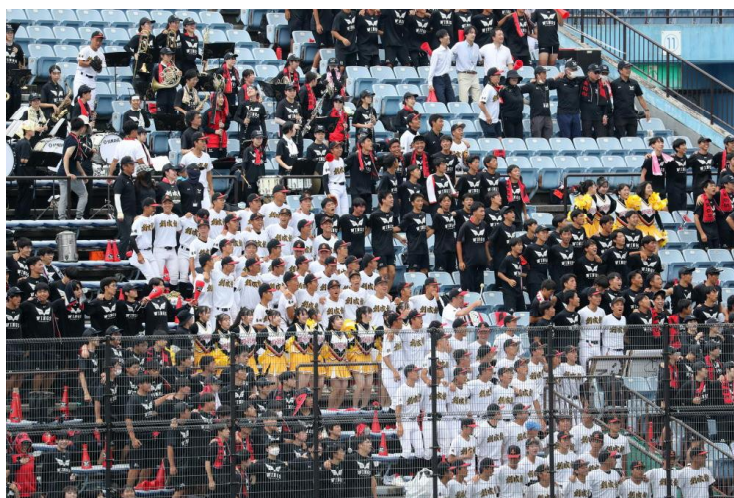
これまで創成館野球部保護者会では、保護者会テーマはありませんでした。今期は敢えて保護者会テーマを『挨拶の徹底』と掲げ、一年間みんなで頑張ってきました。

『当たり前』に感じますが、保護者も選手たちもコロナ禍により高校野球の当たり前が奪い去られました。マスク着用、大声禁止、もちろんスタンド応援禁止とかなり厳しい制限のもと、全国のどのチームも苦しい時間を過ごしたと思います。初夏には規制緩和により、数年ぶりに通常の高校野球が戻ってきました。

そこからは選手も、保護者も一致団結して、本来の創成館らしさ全開で楽しい時間をみんなで過ごせたと思います。

創成館野球部の横断幕には『仲間が宝』とあります。これから更に厳しい社会に旅立つ3年生。夏連覇を目指す2年、1年生。苦しい時も、楽しい時も、嬉しい時もいつも一緒に居てくれた仲間を大事に忘れずに、人間力の成長と共にこれからも踏ん張り、頑張ってください。

保護者の皆さまも私にとっては一人一人がとても大切に、とても大好きな仲間です。最後に甲子園という素晴らしいプレゼントをしてくれた121人の息子よ、3人の娘よ、そして常に挑戦の後押しをしていただいた植田監督と指導者の方々、愉快的保護者の方々。「最高の一年」「最高の夏を」本当にありがとうございました。



全校応援
県営野球場にて



諫早球場での応援



優勝決定
県営野球場にて

===== マネージャーたちの思い =====

長崎工業高校 マネージャー 横尾 彩葉

高校生活で、野球部という存在は私たちの青春でした。振り返ってみると、楽しいこともあれば、辛いこともありました。

新チームになり、マネージャー2人で約40人の部員をサポートすることは、思っていた以上に大変でした。マネージャーとして部員を「笑顔」にすることが私たちの役目だと思い、私たちなりに行動しました。毎日のおにぎりや水分補給のためのキーパーを作り、試合の時にはスコアブックの記入やアナウンスなど、すごく大変でした。

しかし、部員から「ありがとう」や「おにぎり美味しい!!」と言ってもらえると、すごく嬉しくて私たち自身、もっとサポート頑張ろうと思えました。毎日部員とたくさん話をして、私たちの明るさと元気さで支えることができたと思います。結果が出ずに落ち込んでいる部員には他の部員が声をかけて一緒に乗り越えている姿を見て、「私も頑張らないと」と力をもらいました。マネージャーとして、部員を支える立場だけど、部員に助けてもらうこともたくさんありました。

60人全員で挑んだ最後の夏の大会は、私たちにとって忘れられない大会になりました。三回戦の海星戦では、僅差で負けてすごく悔しかったけど、全員が力を出し切って、笑顔で部活動を終えることができました。

本当に毎日野球部のことを考えていたのと、引退した今強く感じます。長崎工業野球部のマネージャーになれてよかったと心から思います。毎日とにかく楽しかったし、試合に勝った時は思いっきり喜んで、負けた時は悔しがって、たくさんの壁と一緒に乗り越えて、たくさん笑って、本当に幸せでした。

日々サポートしてくださった、監督をはじめとする先生方や、保護者の方々には本当に感謝しています。野球部に入って、野球の素晴らしさや、仲間の偉大さ、「笑顔」でいることの大切さを知りました。

みんなかっこよかったです。本当に最高のチームでした。



夏の猛暑 チームメイトで搬送
県営野球場にて



長工グラウンドにて
写真提供：長崎工業高校



諫早球場にて

長崎東高校 マネージャー 濱 京桜

「マネージャーをやってみたい」小さな好奇心から始まった私の高校野球でした。しかし、私は勉強についていくのに必死で、部活を続けられるか不安でいっぱいでした。そんな中部員は楽しく野球をしており、キーパーの作り方や、スコアブックの書き方など新たな学びが多く、いつしか部活が私の生きがいになっていました。

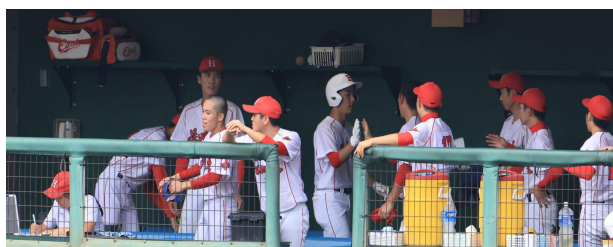
野球部は毎日ハードスケジュールですが、どんなに暑くてもどんなに寒くても一生懸命バットを振り、声を出す部員を見て「私も頑張ろう！」そう思うことができました。大会の補助に関しては監督をはじめとする先生方、野球場の管理者の方々、審判、保護者の方々などたくさんの人の協力で一つの試合がつくられており、皆さんにとっても感謝しています。

私もマネージャーとしてアナウンスをすることで、大会運営に携わることができ貴重な経験となりました。大好きな東高野球部と走り抜けた2年3か月は私のかけがえのない宝物で、私にとって最高の高校野球となりました。

長崎東高校 マネージャー 廣田 風香

野球は1人ではできないスポーツだといわれますが、私は野球部のマネージャーも多くの方々の支えがなかったらできなかったと思います。何もわからない私に一から仕事を教えてくれた先輩方、朝早くても送り出してくれた家族、部員だけでなくマネージャーのことも気遣ってくださった先生方、中でも一緒に入部して約2年と3か月、きつい時間も楽しい時間も共有してきた10人の仲間たちには感謝の気持ちでいっぱいです。

部員が暑い日も寒い日も一生懸命練習し、努力を重ねて勝利を勝ちとる姿に、私も多くの感動と刺激をもらいました。振り返ってみると、決して楽な部活だったとは言えませんが、それでも私はマネージャーとして高校野球に携われて幸せだったなと思います。これからも自分が多くの方々に支えられているということをお忘れずに過ごしていきたいです。



諫早球場にて



県営野球場にて

写真提供：長崎東高校

私は、多くの人に出会い、さまざまな貴重な経験をさせていただいたこの三年間にとっても感謝しています。はじめは野球のルールも分からず、興味本位で長崎北陽台高校野球部にマネージャーとして入部しました。入部当初は、高校野球がこんなにも感動して元氣がもらえるものだということを想像もしていませんでした。初めて経験した夏の大会では、先輩方が支えあい、励ましあいながら野球している姿を見て感動し、「自分はこのままじゃだめだ」と思わせてくれるきっかけにもなりました。それから私は、自分なりに何ができるかを考えて行動することを心がけていました。時には部員やマネージャーに迷惑をかけることもあったと思いますが、たまに聞ける「ありがとう」ほど、嬉しかったものはありませんでした。最後の夏の大会のあと、部員の一人から「最後にベンチに入れてあげられてよかった」と言ってもらったとき、長崎北陽台高校野球部に入部してよかったなと強く感じることができました。

また、私たちはマネージャーとしてたくさんの高野連の仕事に携わらせていただきました。例えば、公式戦の開会式・閉会式・試合のアナウンス、チケットのスタンプ押し、スコアボードの操作などです。補助員の仕事は責任が大きいものばかりで、常に緊張感を持ちながら仕事をこなしていました。間違えてしまったときは、高野連の先生方が優しくご指導してくださり、最後までやりきることができました。高野連の仕事のほかにも、お客さんのおもてなしの仕方などさまざまなことを教えてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。多くの先生方に出会えたことも大きな財産です。

この三年間は休みもほとんどなくて、大変なことも多かったけれど、くじけそうになるたびに部員の真剣に野球しているところや、楽しそうに話している姿に何度も元氣をもらいました。これからは、この三年間で学んだことを生かし、感謝を忘れず、さまざまなことを乗り越えていこうと思います。



諫早球場にて

写真提供：長崎北陽台高校

私がマネージャーになったきっかけは、野球のルールを多少知っていたということとマネージャーというものへの憧れからでした。

私が入部前に想像していたキラキラした高校生活とは大きく異なり、帰宅したら疲れてすぐに眠ってしまうほどのハードスケジュールでしたが、それをも上回るやりがいや楽しさが野球部にはありました。最初は難しく感じたスコアブック書きも回数を重ねるごとに楽しくなってきました。ビッグNのアナウンス室のあの安心感、普段はふざけているのに野球のこととなると真剣な顔つきになる部員たち、すべてが私にとって新鮮でワクワクさせてくれるものでした。

野球部は私のいちばん居心地がいい場所でした。部員のみんなが人見知りの私に対しても積極的に話しかけてくれて、たあいもない話をしたり、「ありがとう」と感謝を伝えてくれたり、そんな当たり前の日常が私に野球部に入ってよかったと感じさせてくれました。辛かった記憶も楽しかった記憶も野球部に関する記憶の全ては私の青春の一部で、どれも優劣つけがたい大切な思い出です。でも、その中でも私の心に一番心に残っているのは、最後の試合で真剣に、でも楽しそうに野球をするみんなの姿です。その姿を見た瞬間、二年半みんなが甲子園を目指して頑張っていた練習中の姿や、部員やマネージャーみんなで楽しく過ごした試合終了後の時間などたくさんの思い出がいきなり頭の中にあふれてきました。私はこの瞬間を忘れることができないと思います。

野球部マネージャーの活動を通して出会った部員、マネージャーの仲間、顧問の先生方や高野連の役員の方々には迷惑をかけることもありました。本来支える立場なのに、逆に支えてもらうこともたくさんありました。今は周りに恵まれているということをつくづく感じる毎日で、そのような方々に出会わせてくれた野球部に本当に感謝しています。



諫早球場にて

写真提供：長崎北陽台高校

私が野球部に入ったきっかけは、部活動見学の時、野球部の活動を見に行ったときに、先輩方にとってもやさしく声をかけていただき、部の雰囲気がよかったからです。野球のルールもあまりわからない状態で入部したので、ルールを覚えることはもちろん、試合でのスコアブック書きやアナウンス、試合の準備、補食のおにぎり作りや選手のサポートなど、一つひとつ仕事を覚えて、こなしていくことは大変でした。ですがやっていくうちにやりがいを感じ、今振り返ればとても充実した2年半だったなと思います。

新チームの活動が始まったときはなかなか公式戦で勝つことができず、苦しい時期もありました。しかし、夏の選手権大会では初戦を突破でき、ベンチでスコアブックも書くことができ、選手と一緒に勝利を喜ぶこともできたのでとてもうれしかったです。2回戦で惜しくも敗退してしまいましたが、部員のみんなが最後まで諦めずに一生懸命プレーをしている姿を見てとても感動しました。

この2年半は支えるだけではなく、自分も部員やほかのマネージャーの皆に支えられているのだなと気づくことができました。そしてコロナ禍での大会の開催やたくさんの工夫をしてくださった高校野球連盟の方や審判の方、球場の方など、たくさん支援してくださった方々と触れ合うことができたことにも改めて感謝したいです。そして何よりもこの2年半たくさんの思い出と感動、喜びをくれた3年生11人に「ありがとう」、「最高だった!!」と伝えたいです。



開会式での入場行進 県営野球場にて



試合が終わって
諫早球場にて

野球部のマネージャーとして過ごした3年間はきついことや苦しいことがたくさんありました。ですが、野球は楽しいという気持ちがあったからこそやめることなく引退まで頑張ることができました。NHK杯では長崎南高校に3-6で敗戦し、残すところは夏の大会だけとなりました。

夏の大会の対戦相手は佐世保実業高校。顧問の青島先生は「勝機がないわけではない」と部員に伝え、最後まで全力を尽くしました。試合当日は強風、雨天という悪天候のなか、大接戦のシーソーゲームとなりました。最終回で2点取り返して、逆転したときは思わず立ち上がり叫んでしまいました。

私は、スコアラーとしてベンチに入らせてもらった中で、これまでの中で1番楽しかった試合でした。結果は2-3で敗戦しましたが、悪天候の中、大健闘した部員は私の誇りです。そして、そんな素敵な部員を3年間支えることができ本当に幸せでした。最後の試合で部員に「勝たせてあげられなくてごめん」といわせてしまって、サポート不足に悔しさを感じましたが、たくさんの保護者の方に「ありがとう」といっていただいて、とてもうれしかったです。

3年間マネージャーとして支えてくれた部員や、家族がいたからこそ、最後までマネージャーを続けることができました。みんなに本当「ありがとう」と言いたいです。



開会式入場行進 県営野球場にて



練習試合にて 写真提供：対馬高校

波佐見高校 マネージャー 松尾 千尋

私はこの3年間、波佐見高校野球部でGM（グラウンドマネージャー）として経験してきたことは“一生の宝物”です。

1年生の時にGMの先輩がいなく、不安しかなかったです。でも、先輩のマネージャーさんや部員の人たち、同級生の部員やマネージャー、みんなのお陰で不安な気持ちがなくなりました。

学年を重ねる度に波佐見高校野球部のGMとしての自覚ができ、甲子園への憧れが強くなっていきました。結果は3年間一度も甲子園へ行くことはできなかったのですが、毎日毎日甲子園に出て、優勝することを目標に掲げ努力する選手を見て、たくさんの勇気や活力をもらいました。色々苦い経験もしましたが、今振り返れば良い思い出です。本当に幸せな3年間でした。

『感謝無敵』この3年間で何度も目にし、口に出し、思い続けてきたこの言葉が大好きです。これからも忘れません！

地域の皆様、保護者の皆様、波佐見高校野球部、監督、指導者の皆様、学校の先生方、先輩、同級生や後輩の皆様幸せな三年間を本当にありがとうございました。



佐世保野球場にて



県営野球場にて

写真提供：波佐見高校

波佐見高校 マネージャー 村松 愛純

私に高校野球に携わるきっかけをくれたのは、同級生の部員たちの存在です。入学当初、どんな部活動に入部しようか迷っていた時「野球部のマネージャーになりませんか？」と声をかけてくれました。

”甲子園”という夢に向かい、毎日朝早くから、夜遅くまで練習に励む選手たちを目にし「夢を叶えるためにマネージャーとして野球部を支えたい。」と思い、入部しました。

最初は野球のルールもわからず、不安でしたが先輩マネージャーさん方が優しく教えてくださり、少しずつですがマネージャーとしての実感が湧きました。

2年生の夏、先輩が引退され、下にマネージャーがいなかったため、1人で務めることになりました。尽きることのない仕事に追われ大変ではありましたが、同級生の部員だけでなく、後輩たちも進んで仕事を手伝ってくれて支える立場でありながらも、たくさんの方々に協力してもらい、貴重な経験ができた3年間でした。

嬉しい時も、辛い時も、3年間共に戦うことのできた12人の仲間、最後まで未熟だった私についてきてくれた43人の後輩たち。毎日、熱くご指導して下さった指導スタッフの皆さん。そして、いつも心の支えとなり、応援して下さった保護者の方々に高校野球を通じて出会うことができたこと、波佐見高校野球部のマネージャーができたことすべてがこれからの私にとって誇りであり、財産です。

この3年間で経験させていただいたことを、今後の私の人生に生かしていきたいと思います。3年間ありがとうございました。



開会式入場行進



波佐見高校にて 写真提供：波佐見高校



県営野球場にて

私はもともと、高校に入学してから部活動に入る予定はありませんでした。先輩から、「野球のマネージャーの見学に来ませんか」と誘われ、見学だけならと初めは軽い気持ちで参加しました。そこで、声がかかるほどの大きな声を出し、汗を流しながら一生懸命に練習をしている部員の姿を見て心を動かされ、入部を決意しました。

練習中の部員たちの目や大きな身体を見て、こんなにも努力している部員たちを一番近くで応援し支えたいと思いました。

この2年半、私にとっては毎日が新しいことばかりでたくさんのことを学ばせてもらいました。そして野球というスポーツを大好きにさせてくれました。1年生の時、緊張しながらも初めてマネージャーとしてグラウンドに行ったあの日。私の不安な気持ちを感じ取ったのか、たくさんの部員の方が話しかけてくれたり笑わせてくれました。その日からもう2年半も経ったと思うと本当に一瞬だったなと思います。

私はまったく完璧なマネージャーではなく、ミスもしてしまうし、何かが特別できる人間ではありませんでした。そのため完璧なマネージャーを目標にするのではなく、部員を笑顔にできるようなマネージャーを目標にしてきました。しかし今思うと、毎日私の方が選手から笑顔をもらっていたなと思います。少しでも笑顔になってくれた部員がいたらいいなと思います。

休部していた時期もあり、復帰をすると、みんな笑顔で「また一緒に頑張ろう」「一緒に甲子園に行こう」と声をかけてくれました。その時、この人たちのマネージャーで本当に良かったと心の底から思いました。毎日毎日きつい練習を一生懸命遅い時間までやっている部員を見て、どんなことがあっても部員の方が100倍頑張っているんだから私ももっと頑張らなくちゃいけないという気持ちで日々を過ごしてきました。

家族と過ごす時間よりも野球部のみんなといる時間の方が多いのではないかというほど共に過ごしてきました。数々の大会では、嬉し涙、悔し涙、たくさんの笑顔と共にしてきました。最後の夏、甲子園予選では、3試合目のスコアラーとしてベンチに入りました。リベンジ戦となる海星との試合でした。絶対に勝って甲子園に行こうという気持ちで全員で挑みました。試合が終了するその時まで、絶対に勝つという気持ちは揺らぐことはありませんでしたが、サイレンが鳴り0-1で負けが決まりました。本当に終わってしまったんだとすごく悔しい気持ちでいっぱいでした。でも私より選手たちは、それ以上に悔しかったと思います。2年半ずっと甲子園に行くためだけに苦しいこと、辛いことを乗り越えて頑張ってきた姿を誰よりも一番近くで見ってきました。そんな選手たちの涙を見るのは本当に辛かったです。

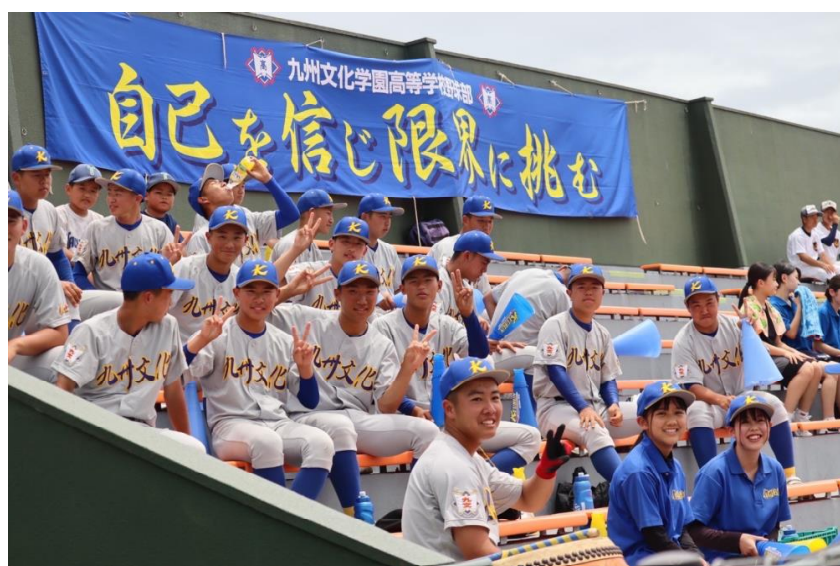
しかし目指してきた甲子園には行けませんでした。誰が何を言おうとも九文の選手が一番かっこよかったと自信を持って言えます。本当に最後までかっこよく、誇らしく思いました。それと同時に部員たち、マネージャー、先生や監督さん、保護者の方々、今まで応援してくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。悔しい結果となりましたが、最後はみんな「本当にありがとう」、「楽しかった」、「おつかれ様」と笑顔でい

い合って終われたので良かったです。引退して1ヶ月以上経ちましたが、今でも選手の動画を見返して笑顔をもたらしています。この2年半の思い出は私にとって宝物です。

これからみんな別々の道を進むことになるのでそれぞれ自分を信じて頑張ってもらいたいです。これからもOGとして九州文化学園の野球部をそして高校野球を応援しています。お世話になりました。本当にありがとうございました。



写真提供：九州文化学園高校



佐世保野球場にて



写真提供：九州文化学園高校

私は、野球のルールも何も分からずに入部しました。野球部の部活動体験に参加した時、先輩方がとても優しくったり、部員が楽しそうにプレーしている姿を見てマネージャーになって、頑張るみんなを近くでサポートしたいと思い入部しました。誰かの支えになるということは、人の役に立つことができます。支えになり、感謝を伝えてもらった際には、とても嬉しいです。たった5文字の“ありがとう” それだけで頑張れる自分がいました。

入部当初は野球のルールやアナウンスを覚えることが精一杯で、なかなか部員とコミュニケーションをとることができない日々が続きました。しかし、マネージャーの仕事にも慣れ、後輩が入ってきて、教える立場になった頃には、仲も良くなり、毎日楽しい日々が続きました。学校であった何気ない出来事を話したり、時には相談を受け、親身になって寄り添いました。今思うと、これらの日々はとても貴重な時間だったことに気づきました。毎日が当たり前のように過ぎていった日々は当たり前の日常ではなかったことにも気づきました。

2023年7月20日、私たち15期生はこの日が最後の高校野球生活となりました。思い返すと、顔が赤くなり頭に血が上るほど、大きな声で思いをたくさん叫んでいました。球場全体に両校の声援が響き渡り、胸の前で両手を強く握りしめ、ひたすら祈りました。“大丈夫、諦めるな、頭の中には、今までみんなと過ごした日々が浮かび、同時に涙も流れました。きつくて苦しかった時もありましたが、ひたすら楽しい思い出ばかりが思い出されま。しかし、惜しくもその思いは届くことなく、15期生13名は高校野球生活に幕を閉じました。私は、高校野球に全ての青春を捧げました。この2年半は、家族より野球部のみんなと過ごす時間が長く、九文野球部マネージャーとしての長いようでとても短い時間が一瞬にして終わりを告げました。

怪我で思うようにいかなかった部員、夜遅くまでグラウンドで自主練に励む部員、それぞれに特別な思いがたくさんあったと思います。3年生8名、マネージャー5名という最も人数が少ない学年でした。どんな時もずっと一緒にいた仲間たちでした。もうこの日々にもどれないのが正直寂しいです。しかし、マネージャーを2年半できたことに悔いはありません。むしろ、九文野球部でマネージャーができたことに誇りを持っています。

高校野球を通じて、野球だけでなく社会のマナーや正しい言葉遣いなど コミュニケーション力、そして誰かの支えになるたくさんしたことなどを経験し、自分自身が大きく成長することができました。こんなにも素敵な部員、マネージャー、指導者の人たち、保護者の方や高野連の方々に出逢えたことを本当に感謝しています。

最後に、九文野球部のみんなへ。みんなの笑顔と元気さに毎日心が救われてました。本当にありがとう。後輩が甲子園で校歌を歌う、夢を叶えてください！
がんばれ、九文野球部!!!



高校野球に捧げた2年半は長いようで短く、私の人生に熱く刻まれるものとなった。私が野球部のマネージャーになりたいと決意したのは、幼い頃だった。兄が野球をしていたこともあり、幼心ながら高校野球の魅力に惹かれ、高校野球に関わりたいと思い入部を決めた。マネージャーは表舞台に立てない裏方の仕事だが、表舞台に立てないからこそ得られるものがあった。決して楽なことばかりではなく、たくさんの困難があり、その苦悩を無駄にはしなかった。先輩の背中を追うことに精一杯だった私たちも新チームになり、人数の多いマネージャーの中で自分に何ができるのか、その多さを生かして諫早高校のマネージャーにしかできないことは何かを模索しながらマネージャーのレベルも徐々に上がっていった。NHK杯では県大会まで進むことができ、ベンチから声を出して一生懸命プレーする選手を応援する楽しさやその一体感、9回裏の土壇場でのサヨナラの瞬間を今でも鮮明に覚えている。

NHK杯を終え、夏が近づくにつれてチームの士気が高まり、最後の夏にかける思いが徐々に高まっていった。初の開幕戦を迎え、どのチームよりも短い夏となってしまった。最初は受け止めきれない現実に頭が追い付かなかったが、やり切ったという思いが勝っていた。

毎日自転車を漕いで部活に行くことが当たり前だった日々が当たり前じゃなくなった今、私にとって諫早高校野球部で過ごす日々が気づかぬうちに無くてはならない大きな存在となっていた。

全国には高校野球のマネージャーがやりたくてもできない人がたくさんいる。マネージャーをできるのは当たり前なことではなく、選手、指導者、保護者の方々、球場関係者をはじめ、多くの支えがあったからマネージャーとして高校野球に携わることができたと思う。貴重な経験をさせていただき、たくさんの学びから人として成長することができたこの2年半。感謝を伝えるとともに、この恩をまたどこかで返せたらと思う。



諫早球場にて 写真提供：諫早高校

私は、これまで姉と兄の背中を追いかけてきました。私が小学校の頃に野球を始めたのも、創成館高校に入学したのもそうです。また、2人は高校で野球部に所属していました。そんな憧れの2人ですが、成し遂げていないことがありました。それは、自分の代で甲子園に出場するということでした。

そこで、私は夢を持ちました。それは創成館高校でマネージャーになり、家族で最後のチャンスである自分の代で甲子園に行くということでした。

野球部に入部して、今までとは変わり、マネージャーというサポート側の立場になった私は、選手がなるべく野球のことだけに集中できるような環境を作りたいと思いました。2年間、先輩方と過ごし、たくさんの学びや刺激を受けました。そのため先輩のような素晴らしいマネージャーにならないといけないという気持ちが強くなりました。

先輩が引退されて、自分たちの代が始まりました。チームが公式戦で思うような結果が出せずにいたとき、こんな私がマネージャーだから勝てないのではないかとも思いました。そして毎日申し訳なさや、自分に対する悔しい気持ちでいっぱいでした。

しかし、私は、そんな暗い気持ちを持っていても何も変わらないと思い、ポジティブ思考へと切り替え、次の行動に繋げようと思いました。そうして毎日、選手のみんなが頑張る姿に力をもらいながら、日々向上心を持って、後輩たちとともに最後まで頑張ることができました。

最後の1年を自分で振り返ってみても、最初から最後まで憧れの先輩方とはかけはなれたマネージャーだったと思います。それでも、自分なりにマネージャーをやりきれました。

また、指導者の方々にはたくさんの迷惑をおかけしたと思います。しかし、そんな私にもいろいろな指導をして下さったおかげで、たくさんのことを学び、自分の成長へと繋がりました。本当にありがとうございました。

そして、最後に部員のみんにはたくさんの感謝を伝えたいです。いつも優しく接してくれて、プレー以外でもたくさんの元気をもらいました。自分たちの代でたくさん苦しみながらも、最後には先輩たちのリベンジを果たし、夢の甲子園を決めたみんなは、本当にかっこいいです。スタンドでもベンチでも最高の景色を見せてくれてありがとう。たくさんの夢を叶えてくれたみんなには、感謝の気持ちでいっぱいです。みんなのマネージャーでいられて本当に幸せでした。

この約2年半の間に支えてくださった全ての方々に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。



創成館高校グラウンドにて



諫早球場にて



甲子園球場にて 写真提供：創成館高校

私は、約2年半マネージャーとして高校野球に携わり、大好きな野球に高校生活の半分以上の時間を費やせたことを誇りに思っています。

「夏の大会では、絶対私がベンチに入る」そう思いながら、入学式後に誰よりも早く学校の野球場に向かいました。さっそく次の日から練習に参加したことを今でも鮮明に覚えています。

夏の大会でベンチに入れるのは監督や選手からの信頼がある人、私の中で勝手にこういう考えになっていました。そのため、誰よりも早く入部届けを出し、たくさん働き、信頼されるマネージャーになると誓い、先輩方からいろいろ学びながら自分でなんでも出来るようになると日々頑張りました。

入学当時マネージャーは、2・3年生共に5人ずつおり、1年生は私1人でした。そういう先輩方に恵まれた中、マネージャー生活がスタートしました。また、通学時間がかかるから、1年生だからという先輩たちの言葉は嫌いでした。同じマネージャーとして選手を少しでも多く支えたい、早く信頼されたくさん頼られたいという思いが強くなりました。そのため何でも引き受けては、最後まで残って仕事をするという日が多くなりました。

諫早球場での補助員の日、先輩から受け継いだアナウンスをし、パソコン等のやり方も覚え、後輩たちに教えながら私も一緒に成長できました。高野連の先生方や審判員の方からお褒めの言葉をいただきとても嬉しかったです。

そしていよいよ私たちの代になり、2年生の頃からメンバー入りしていた選手も多く、秋の大会ではベスト4、NHK杯では準優勝でした。多くの祝福の言葉をいただくたびに、今年は例年とは違い多くの方に期待されていたんだなと実感しました。

待ちに待った夏の大会。初戦で、なかなか点が取れず延長戦になりました。勝ち越したかと思っていた矢先に逆転されサヨナラ負けでした。そのため思うように結果を残すことができませんでした。チーム全体がベストコンディションではなかったこと、今までのいろんな思いがこみ上がり、スコアラーとしてベンチに入っていた私は、初めて涙がこぼれ落ちました。今まで頑張ってくれた選手たちが崩れ落ちて泣く姿を見るのはとても辛かったです。これまで全員で勝ちにこだわり、そして、「全員で」という合言葉、「歴史を変える」という言葉を目標に切磋琢磨し合いながら練習に励みました。強豪校との練習試合でも諦めず食らいつく姿、どんなに辛い練習でものり越える姿、野球の面白さを伝えてくれるような素晴らしい試合など高校野球は私に感動や楽しさを教えてくれ、また再認識させてくれました。

たくさんのかことを乗り越えられたのは、指導者の先生や仲間全員のおかげです。本当に毎日が充実した楽しい2年4ヶ月でした。ありがとうございました。



長崎県営野球場にて



鎮西学院高校
グラウンドにて



写真提供：鎮西学院高校

国見高校 主将 石井 脩瑛

2年3か月の高校野球生活を終え、私は充実感に浸っています。

なぜかという2年3か月一生懸命に走り抜けたからです。これまで部員不足、コロナウイルスなどたくさんの困難や苦労がありました。それでも自分に負けず、相手に負けず戦ってきました。そして困難や苦労を乗り越えることができたのは、親、指導者の先生方や仲間たちなど多くの支えがあったからです。高校野球に限らず、周りの支えがあるからこそ困難や苦労を乗り越えられると思っています。

私は、兄の背中を追いかけ、国見高校野球部に入部しました。私が入っても部員数は6人。甲子園にはほど遠いチームでしたが、やっぱり夢は甲子園でした。

入部してからすぐに連合チームとしての活動がスタートしました。多数の指導者の方々、連携の難しさ、勝てないなどさまざまな不安要素がありました。連合チームがいやだという気持ちが初めは多くありました。この気持ちが変わったのが、2年生の夏が終わり、自分たちの代になってからです。新チームの五校連合の仲間に出会ってからです。普段一緒に生活するわけでもないし、平日は一緒に練習もできない、会えるのは多くても一週間に二回なのにとっても仲がよいのです。冗談を言ったり、いじりあったり、このチームワークが五校連合の武器でした。何よりも一緒にいる時が楽しかったです。今までの連合チームの不安要素や嫌な気持ちは自然となくなっていました。「このチームなら勝てる」そう思っていました。

しかし、公式戦ではもう少し、あと一歩というところで勝てず、連合チームの壁を感じていました。

四校連合になり、迎えた夏の大会。連合チームは夏一勝もしたことがない。だからこそ私は、いろんな場面で「歴史を変える」「歴史を作る」という言葉を多く発してきました。そして一回戦勝利。四校分の校歌が流れたあの時間は、忘れられない思い出です。次の二回戦の長崎商業戦。1年生の時も同じ二回戦で戦いました。その時は、7回コールドで敗れました。あの時のリベンジ。当時3年生でともに戦った兄のリベンジに燃えていました。二回戦にもかかわらず、国見高校は全校応援、他の連合チームの高校も応援に駆けつけてくれました。あの応援には鳥肌が立ったのを今でも覚えています。「応援は力になる」、「応援は自分の持っている力以上のものを出してくれる」、そう感じました。

試合が終わり、スタンドに挨拶に行った時のあの光景、みんなの声を思い出すとこみ上げるものがあります。私史上最高の夏になったのは、間違いありません。そして多くの人の予想を覆し、連合チームのイメージを変え、これから増えて行くであろう連合チームに希望を与えたのではないかと思います。

私は、この連合チームのキャプテンをしていました。単独チームのキャプテンより難しかったのは間違いありません。しかしこのキャプテンという役目が、私を変え、大きく成長させてくれました。高校野球ありがとう。そして五校連合のみんなありがとう。

私には夢があります。それは理学療法士の資格を取り、選手を支え、選手のパフォーマンス向上を手助けするスポーツトレーナーになることです。最終的にスポーツトレーナーの経験を生かした高校野球の指導者なることです。

高校時代に行くことができなかった甲子園を次は指導者として選手と一緒に目指していきたいと思います。高校野球は私にとって青春でした。

※五校連合…国見・口加・島原翔南・諫早東・諫早商業

※四校連合…国見・口加・島原翔南・諫早商業



佐世保野球場にて



県営野球場にて



口加高校 主将 井上 蓮 (開会式選手宣誓者)

私は、中学校から野球を始めましたが、高校に入学したらプロ野球選手と同じ硬式ボールを使うことでやっと本当の野球ができるととてもうれしく思っていました。

高校入学時は、口加高校でも部員が多かったため、公式戦に出ることはなかったのですが、練習試合ではたくさんチャンスをいただき、実戦経験を積むことができました。

2年次からは部員が足りなくなったため、初めて連合チームとして新チームがスタートしました。正直言って結成当初は複雑な気持ちだったのですが、合同練習や練習試合を重ねるごとに、個々のレベルアップやチーム力の向上を実感できて、連合チームでの活動が楽しくなっていました。2年生次の夏の大会は、善戦したものの初戦で負けてしまいました。

3年生が抜けて不安しかない中、また新たに別のチームも加わって連合チームがスタートしました。自分たちが最高学年となった連合チームは、2年次の連合チームとはまた違った雰囲気、前のチームよりもさらに磨きのかかったチーム力だったと思います。

最後の夏の大会は、私にとって思い出に残るものでした。まずは「選手宣誓」という貴重な経験をさせていただきました。まさか自分が当たりくじを引くとは思っていませんでしたので、当たった時はとてもびっくりしました。本番まで、自分の思いを長崎県の高球児を代表して堂々とできるように何度も練習しました。本番では、納得のいく一番いいものができたので良かったです。

チームとしては、夏の大会連合チーム初勝利をかけて、佐世保地区の連合チームと対戦しました。見事試合には勝利することができ、連合チームの夏の大会初勝利を挙げることもできました。そして二回戦は、第七シードの長崎商業高校と対戦しました。この試合では、単独チームからの公式戦初勝利を目指して頑張りました。結果としては敗れてしまいましたが、スタンドからの大歓声を受け、シード校相手に自分たちの持ち味を出して、9回まで戦い抜くことができました。個人的には、最後の夏にシード校の投手から長打を打つことができ、今までの頑張りが報われた気がしてとてもうれしかったです。

また、自分たちがシード校相手に9回まで戦えたのは、たくさんの応援があったからだと思います。改めて応援の力の偉大さ、ありがたさを感じる夏になりました。

私の高校野球は、入学前に思い描いたものとは違いましたが、いろいろな経験をさせていただいた最高の3年間になりました。ありがとうございました。



開会式選手宣誓



県営球場にて

付録2 ***** 支える人たちの思い *****

長崎県審判協会 審判委員 田中 康隆

令和5年夏、スタンドに大きな声援や歓声が戻ってきました。令和2年には全世界で大流行した新型コロナウイルス感染症により第102回全国高等学校野球選手権大会は中止となり、それからの2年間は、感染防止対策として、観客の人数制限、声出し応援の禁止などで球児の皆さん、高校野球ファンの皆様にとって辛い期間であったことは言うまでもありません。

我々審判委員にとってもこの3年間は、球場に入る際の検温・体調チェック・行動記録・手指消毒などの感染防止対策を行い試合に携わってまいりました。

毎年この夏の大会は高校球児の皆さんにとって、特に3年生にとっては高校野球最後の大会でもあり、この大会に懸ける思いは格別なものと思います。我々審判委員はその思いのすべてを試合で発揮できるよう、グラウンド内では澁刺とした動き、選手への声掛け、そして何より正確な判定を常に心掛けています。

冒頭にも述べましたが、今年はスタンドからの大きな声が選手を励まし、ブラスバンドのテンポのいい音楽が流れ、一球ごとにも拍手、歓声で試合が盛り上がり、立審をしながら「これが高校野球だ！」と胸が熱くなりました。

最後に、高校球児の皆さん今年もたくさんの感動をありがとうございました。また、高校野球を支え、応援して下さるすべての皆様へ感謝申し上げます。そして私自身、これからも高校野球に携わらせていただく事に誇りを持ち、審判委員として日々精進してまいります。今年の夏も「私たちに感動と勇気を与えるプレー」本当にありがとうございました。



主審を務める 諫早球場にて



私は現在、中学校に勤めており中学生に対して野球の指導を行っています。そのため、私にとって「高校野球」とは、今まで関わった子たちが3年間でどのように成長したのかが表現される場であり、「夏の大会」はその成長の集大成が披露される場として、毎年とても楽しみにしていました。

また、夏の大会のパンフレットや長崎新聞に載っているチーム紹介や試合結果を見て、「エースになっているな」「中学生のときとは違うポジションで出ているな」「背番号をもらえるまでよく頑張ったな」「ヒットを打っている」「投手として投げている」などと教え子たちの活躍に一喜一憂することも夏の楽しみであり、さらに今年は「監督名のところに教え子の名前がある」という新たな驚きもありました。そのような「高校野球」の「夏の大会」に、私が審判員として携わるということは、とても誇らしいことだと思いますし、教え子たちの成長の集大成を同じグラウンドからより間近で見ることができるため、とても幸せに感じています。

しかし、それと同時に大きな責任感やプレッシャーも伴います。今年初めて夏の大会に審判員としてグラウンドに立たせていただきましたが、試合中の白球を追う選手たちの表情やしぐさを間近で感じることができ、中学生だった頃とは比べものにならないほど熱い感情や思いが溢れ出ていました。そのため私も審判員としてその思いに応えられるような正確な判定をしなければという使命感を感じることもできた大会になりました。

これからも、「高校野球」に携われることへの喜びや責任感を忘れず、そして「高校野球」を支えてくださっている多くの方々への感謝の気持ちを持ちながら、正確な判定を心がけていきます。また、教え子たちのこれからの活躍を期待するとともに、選手たちの熱い思いに応えられるよう、私自身も審判技術の向上に努めていきたいと思っています。



三塁塁審を努める

諫早球場にて

バーチャル高校野球画像より



対馬高校 監督 青島 立弥 「野球ができる喜び」

私は、今年度より対馬高校へと転勤となり、正式に監督という重責を任せられました。前任校では3学年45名以上、2学年でも30人を超える部員がおり、施設も県立校ながらも内野には黒土、打撃用のゲージもあり、恵まれた環境だったと感じています。

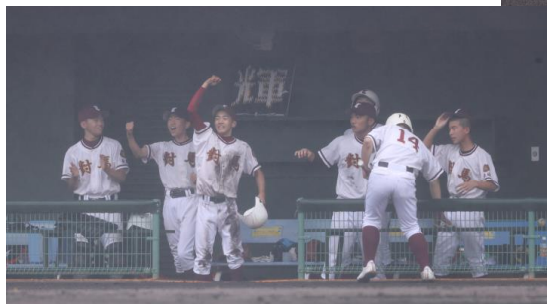
対馬高校へ赴任し、私が初めてわくわくした気持ちでグラウンドに行くと、そこにはお世辞にもきれいとは言えないグラウンドに10名の選手がいました。ただ、彼らは野球をする喜びを体いっぱいに表示し、野球がうまくなりたいと懸命に練習に励んでいました。私はその姿に「絶対に夏勝たせたい」という気持ちが芽生えてきました。

練習試合で島外に出れば、一回の遠征で2万円以上もかかるうえ、移動にも6時間以上もかかり、確実に本土のチームに比べて実践経験が不足していました。その中で工夫を凝らしながら、自らランナーをして実践練習に加わったり、島内の社会人軟式野球チームにお願いをし、練習試合も島内で行ったりしました。

徐々にチームの技術や精神面、チームワークが向上し、夏を迎えました。結果、接戦の未敗戦。3年生は1年間公式戦で1勝もあげることができずに、高校野球を終えました。

確実に成長した生徒の姿にうれしい気持ちもありながら、勝たせてあげられなかった私自身の力不足も痛感しました。ただ生徒の「ありがとうございました」という言葉にどこか救われる思いがしました。部長の時とはまた一味違った最高の経験をさせてもらったことに、こちら「ありがとう」の言葉しかありません。

夏の大会も終わり現在1・2年生で6名、以前よりは実践練習や打撃練習さえすることも困難になってきました。しかし、私はこれからも長く高校野球に携われるかもしれませんが、生徒にとってはこの2年4か月しかありませんので、手を抜くわけにはいきません。これまで以上の情熱と愛情をもって生徒に指導し続けたいと思います。



佐世保野球場にて

夏が終わり、1ヶ月位経ち新人戦が始まった頃、顧問でもある北島先生からこの原稿の依頼を受けた。お世話になっている北島先生始め理事の方からのお願いでもあるし、苦手だなあとと思いながら、二つ返事とまではいかないが気持ちを文字に起こしてみようと思えた瞬間でもあった。

今年の夏、長崎日大高校は準決勝で海星高校に敗れた。負けたからには反省し、次に活かすしかないのだが、私の弱い心はそう簡単にはいかない。タラレバが頭の中を支配し、ため息をつき、次の行動に移すような日々を過ごした。もちろん新チームは始まっているので、やることはやるのだがモヤモヤした気持ちはなかなか晴れない。

私の心は本当に小さい。負けたあとは3年生と会いたくない。もっとこうしていれば、あの時こんな言葉をかけていれば、顔をみると寂しい様々な思いが込み上げてくるからだ。それも3年生の髪型が変わり、眉毛が少しずつ細くなってきている頃に徐々に解消はされていくのだが。

今年の全国選手権大会は、神奈川県代表の慶応高校の優勝で幕を閉じた。話題になった髪型のせいなのか、ユニフォームのせいなのかはわからないがどこか大学生のような落ち着きのある、その一方で一気に大量得点といったシーンも多く、非常に見応えのあるチームだった。そのお陰で今年も様々なワードがネット上を騒がせているが、それも注目度や人気度が高いせいだろう。

こういった議論の時は決まって歴史が語られる。あの頃は、当時は、私たちの頃はなどなど、子供の頃は鬱陶しく感じていたであろう、そのワードを大人たちは披露する。私もどうしても披露する（笑）。ただ大人になって思うのは、歴史は切っても切り離せないということ。現在プレーする選手たちや指導者はその歴史を尊重しながら前に進まないといけない。

私は中学校時代の恩師から「球けがれなく道けわし」という言葉をもらったことを思い出した。当時はカッコいい言葉だなくらいの認識だったが、大人になってその意味を考えたことがあり、自分なりに導き出した答えは「野球のルールや制度など少しずつ変化するものの、野球というスポーツの本質は変わらないし、その白球を追う子供の目や指導者の勝たせたいという心はいつの時代でも純粹で変わらない。ただそのゴールへの道は正解がなくいつの時代も難しい」ということだ。野球道が何たるかは私にはわからない。ただ、人間のDNAが10年20年、50年100年で変わるとは思えない。「今の子は・・・」自分では使わないと戒めているワードだ。もちろん育ってきた環境も違うし、現代の様々なシステムや人間の利器はめざましい発展を遂げている。だけれども思うのは、100年前も50年前も20年前も、そして今も高校球児が必死で白球を追いかける眼差しは変わらないのではないかということ。夏の大会を通じて、たくさんの感動を子供たちからもらうことができた。心底、勝ちたいと思うから、この仲間と少しでも長く野球がしたいと思うからこそ、心の底から出るガッツポーズや止まらない涙。これが高校野球105年の歴史だと思っている。

今、高校野球のみならず野球界は変革期を迎えているのかもしれない。野球離れ・暑さ

対策・ケガ防止対策などなど、様々な所で議論がなされている。あれほど議論になったタイブレークも板についてきた。

変化を恐れず改革を議論し、進めていくべきだと思う。そして、10年先も20年先も高校野球を楽しみたいと心から思っている。今年の夏を終えて、105回目の夏を紡いでくれた全ての3年生に賛辞を送りつつ、今また白球を追いかける選手たちと一緒に汗を流している。



諫早球場にて



全校応援



保護者応援

長崎県営球場にて

長崎県高等学校野球連盟 理事長 黒江 英樹

今年も夏の大会が無事に終了しました。懸命にプレーし感動を与えてくれた高校球児諸君には、最大限の感謝をしています。また、それを支えてくださった保護者の皆様にも感謝いたしております。今夏は、接戦が多く手に汗握り戦況を見守られたことでしょう。本当にありがとうございました。

甲子園大会でも「創成館高校」が強豪の石川県代表の「星陵高校」を撃破し、長崎県勢として4大会連続（令和2年の大会中止を挟んで）初戦突破することができました。選抜でも4年連続（令和2年は大会中止のため交流戦に変更）で出場しています。

全国大会や九州大会に行くたびに、「長崎は負けなくなったね」「強くなったね」などお褒めの言葉をいただきます。県内の各チームが刺激し合い切磋琢磨していることが結果につながっていると感じています。悲願の「深紅の大優勝旗」が本県に来る日もそう遠くないのではないかと考えています。

さて、甲子園での本県球児の活躍も頼もしい限りですが、私としては夢かなわず敗れ去った者も夢かなった者も、県内の全加盟校の球児が「いろいろな思い出」を持って高校野球を終えてほしいと願っています。私も弱小の普通高校の球児でしたが、指導者や仲間、両親、など周囲の人の応援で、勝てなかったけれど「いろいろな思い出」を持って高校野球を終えることができました。そして芽生えた、「高校野球に携わりたい」という思いで現在の職業に就きました。

高校野球に携わっていると、毎年、素晴らしい感動を球児や保護者の方々にいただきます。その感謝を込めて精一杯、球児のためになるように大会運営・高野連運営をしたいと考えてきました。「恩送り」という言葉のように。高校時代の恩師や当時の高野連・審判委員の方には直接恩を返すことはできません。その恩を今の球児たちに送ることが大切だと思いやってきました。実際には、自分が恩を送る以上に、球児たちから感動や癒やしを頂いてきました。懸命に白球を追いかけ、かなわなくてもかなっても、目標に向かって精一杯努力する球児を見ていると、胸が熱くなり、改めて高校野球の素晴らしさを感じます。

昨年定年を迎え、今年で一線を退くこととなりますが、今まで同様「球児たちのため」にできることを見つけ応援していこうと考えています。



開会式での開会宣言
長崎県営球場にて

あとがき

今年は4年ぶりに平常の選手権大会となりました。これまで制限されていた部分を取り払い軀を切ったような勢いで、高校生の熱い戦いが繰り広げられました。そして各チームの応援も例年通りとなり、保護者・OB・全校生徒が大声援を送ることができる大会でした。

さて、今回の「2023 夏の終わりに」は、それぞれの大会で高校野球に声援をくださる方々にスポットをあて、『高校野球 応援する人たちの思い』と題し、保護者・OB・マネージャーなどにその思いを記してもらいました。

それぞれの立場において、高校野球を応援しようという姿が見て取れ、有り難い気持ちでいっぱいです。

近年、野球人口の減少を目の当たりにしています。県内の高校野球でも連合チームの増加がみられます。今回、連合チームの難しさや楽しさ、高校野球の素晴らしさを国見・島原翔南・口加・諫早商業の四校連合チームの主将に書いてもらっています。困難な条件を克服し、頑張っている高校球児の姿が垣間見れます。今年の選手権大会で全国優勝した慶応高校の「エンジョイ・ベースボール」のように野球を楽しめるよう、高校野球の魅力を発信し、これにより高校野球人口が少しでも増えて行けば嬉しく思います。

今回もたくさんの方々から執筆をいただき、この冊子ができあがりました。心からお礼申し上げます。

文中の写真は、今回も朝日新聞社、長崎新聞社に提供していただきました。また、一部の写真は、各学校の野球部に提供していただきました。ご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

次号は、「2024 夏の終わりに『高校野球 選手たちの思い』」を予定しております。また次回もご協力をよろしく申し上げます。

令和5年10月

長崎県高等学校野球連盟 顧問 北島 弘道

バックナンバーのお知らせ



2021夏の終わりに



2022夏の終わりに

2023夏の終わりに	『高校野球 応援する人たちの思い』
発行	2023年10月30日
企画・編集	長崎県高等学校野球連盟 顧問会 千綿 勝彦 藤武 透 角西 政信 嶋田 佳行 北島 弘道
協力	長崎県高等学校野球連盟 朝日新聞社・長崎新聞社